身近な所の「三社託宣」碑

「三社託宣」とは、平安後期から見られ、江戸期には広く庶民信仰として普及浸透しました。中央に「天照皇太神宮（天皇の祖神)」、向かって右に「八幡大菩薩（武家の祖神)」、左に「春日大明神（公家の祖神)」と記し、その下に託宣（神託ともいい神のお告げ）を載せて一幅の掛軸に仕立てたものを床の間に飾り、信仰の対象とした。託宣の内容は神道･儒教･仏教の三教融合思想に基づき、前記の順に正直･清浄･慈悲の観念を強調しています。この正直･清浄･慈悲の三つの徳目は、日本の象徴的神社である伊勢･石清水･春日の三社において特に強調されたものであり、江戸期神道思想の基本的考え方はこれに由来（依拠）したと云われています。簡潔な表現で分かり易い点が一般に抵抗なく受容され、道徳観念・規範の醸成や倫理観教化の題目として民衆に浸透したものです。

・・・

岩波大橋の場所

・建立は「文政九戌(いぬ)歳八月吉祥日」(1826 年) ――向かって左（西）面に刻字
・この石の裏側には、「金毘(羅)」の刻字がある。よって、二つの顔を持っている。
・また、裏側の下部に「願主」の刻字は確認出来るが、氏名は大地に埋まっていて判読不可である。

図－１

中桜田公園の場所

・建立は、「文久元辛酉(かのととり)天十月大吉祥日」(1861 年) ――向かって右下に刻字
・向かって左面には、「天下太平　国家安穏　村中安全五穀成就」と刻字されている。
・整った力強い字体で素晴らしい。

図－２

中桜田地区の場所

・傾斜した農地にあり一般の人の目につく場所ではない。個人所有である。
・明治四十一(1908?)年三月二十一日、沼沢家建立とある。
・伊勢の御師「三日市大夫次郎秀氏－謹書」の文字がある。
・下段左図のとおりの「線刻不動明王と田の神」碑もある。

図－３

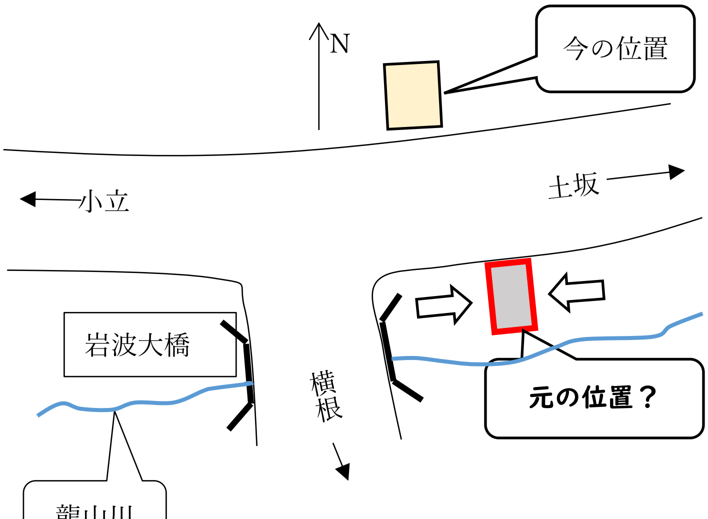
以下、その中の図－１および図－３について注釈的に記述します。

１．岩波の石碑

まずは吾が自宅近くにある前記図－１のものについて、私の見立てを加えておきます。

裏側は傾斜面の土で下の文字は隠されていますが、明らかに「金毘羅」（地際に羅の部首の“罒”が見える）と読み取れます。実際は「金毘羅山」あるいは「金毘羅」と刻字されているのかもしれません。したがって、この石碑は表裏の二つの顔を持っています。このような思いがけないものに出会うと、神仏のご加護の賜物なのかと嬉しくなります。

次に表裏刻字の時期です。最初から二つの顔を持たせたのか、あるいは一方の面を祀っておいて、後に他方の神仏を祀りたいとなって裏側に刻字したのか、との疑問が湧いて来ました。ここで、過去の道路改修の時に移動したという話を思い出しました。隣接する他の石塔を含めた本石碑は、現在のごみ集積所の東側当り（図―４の元の位置？と記述した所）にあったということです。その時の刻字の向きは図―５のとおりであったとのことです。初め元の位置に設置されたとして、以下の理由を以って、最初から意図的に二面性を持たせ、「金毘羅」の文字も同時に刻したものと考えています。なお、信仰の歴史からして「金毘羅山」の方が先という見方もあるかもしれません。

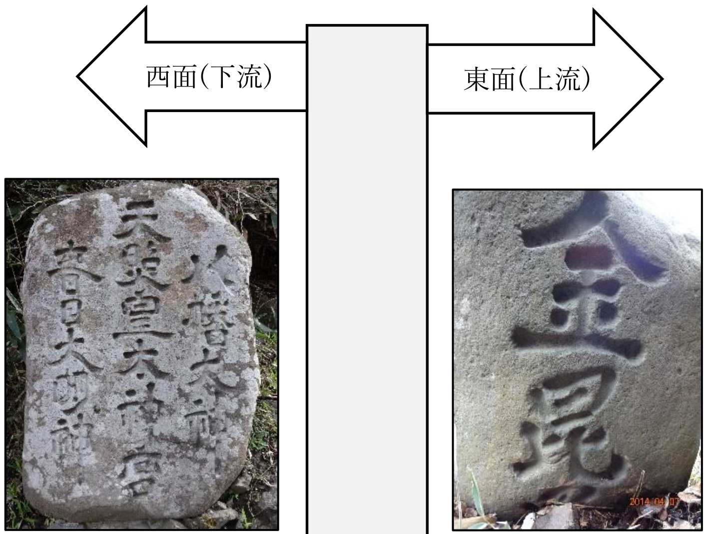


図－４

○　山手（土坂方面）に向って(前)上る人には三社託宣が真正面に見えるように、山手から(後)下る人には金毘羅権現が真正面に見えるように配置した。

○　前者＝三社託宣の文字面を西側（下手、下流側）に向けることにより、この面に向かって拝礼する事は、即ち霊山は御山の瀧山を拝むことと同等になります。

また、三社託宣の文字そのものは、より人口の多い集落の方（下手）を向いていることから、民衆の安穏を見守るご加護の霊威を発している事になります。



図－５

○　後者＝一方、金毘羅(権現)の文字面を東側（上手、上流側）に向けることにより、この面に向かって拝礼する事は、龍山川の河口・最上川・日本海を拝むことと同等になります。漁業の豊漁や航海の安全に対する祈願であります。また、金毘羅の文字そのものは、山手を向いていることから、山の恵みの発揚を促し、かつ荒ぶる自然の猛威に対する鎮魂の霊威を発していることになります。

・・

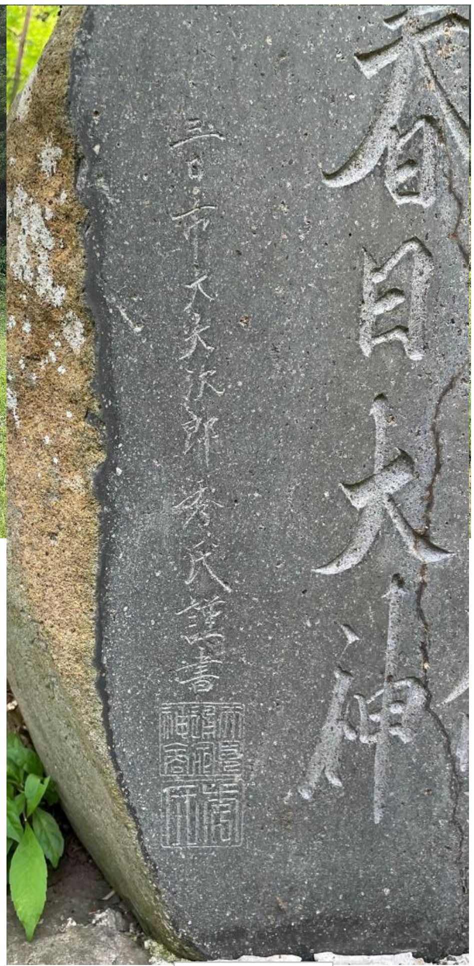
この両面の神威仏光は人の移動・往来をいつも見守って来たということでしょう。先人の知恵の深さを物語っています。

２．中桜田 山間（やまあい）の石碑

（１）眺め

場所は前記図－３の地形図上に記したが、図－6は同図三社託宣碑から山形市街を望んだ状況です。同図左側円内に同碑があります、右側円内に不動明王・田の神が祀られています。

図－６



図－７

（２）同碑と伊勢御師

図－7は同碑左端の刻字「三日市大夫次郎秀氏謹書」です。

村山民俗学会員の市村幸夫さんから初めて教示賜りました。この「三日市大夫（たゆう）　次郎秀氏（じろうひでうじ）」は伊勢信仰布教活動を代表する御師（おんし）であります。沼沢家のご先祖が伊勢参りに行った、あるいは、伊勢参りを代参に託した、あるいは、御師（おんし）がこの地域に檀家周りで来訪し縁を持たれたということが考えられます。何か日誌とか書付が残っていればより面白くなるのではないでしょうか。

（３）建立年

年号は刻字されており、『明治四十□』の四十までは明瞭であるが、□の処は、一なのか、一に見えるが二なのか、干支（えと）の何か一つなのか不明瞭です。

なお、明治は、明治元年＝1868 年・慶応 4 年～明治 45 年＝1912 年 7 月 30 日までの期間です。

・・

私は徘徊散歩している中でたまたま出会ったものです。

市道三本木線からは離れており人目には付かない場所にあります、よって沼沢家以外の殆どは知らないと思います。付近には棚田と最上部に溜池があり、不動明王（水の神）と田の神を設置したのは頷（うなず）けるが、ここに三社託宣碑を安置した理由は何だったのだろうか、自宅の屋敷内ならば分かりますが。

沼沢家を訪問して伺ったが、安置した方はご先祖様になられており、かつ何の書付も見当たらないということで、経緯については今の処知る由もありません。

＝＝

《　おわりに　》

その１；そもそも、この地になぜ、三社託宣の碑なのかという素朴な疑問がありました。建立した当時のこの地域は、農村が殆どの山間地であったでしょう。源氏の鎌倉幕府後期から室町にかけて、中央においては、天皇を中心として、武家と公家が国体政治を支えたという時代背景に鑑みて、「天照皇太神宮」は天皇の祖神を敬（うやま）うこと、「八幡大菩薩」は武家の祖神を敬うこと、「春日大明神」は公家の祖神を敬うことの象徴であった訳です。この思想を世に広める石碑に刻する時、武家が崇敬（信仰）した神を象徴する八幡様と、公家が崇敬（信仰）した神を象徴する春日様が、天皇を象徴する天照大神の両脇を固めたというのは誠に頷けます。その後、江戸期にかけては伊勢の恩師が大きな役割を果し、三社託宣の意義・信仰を地方（民衆・農民）に広め、石碑の建立を推奨したということではないかと考えています。

その２；私は毎日朝食前に先祖の仏壇および神棚に向かって勤行するが、時々、本書冒頭部に記述した「三社託宣」の詞章（ししょう）（ことばがき）（祭文）を読み唱えています。読み下すととてもリズミカルで心地よく内容が響いて来ます。人間生き方の基本中の基本「清く正しく美しく」（真善美に通底）を訓えています。今世にあっては、義務教育期間における道徳教科の一つに加えて欲しいものです。・・・いや、その前に、国民の税金を食い物にしている諸々の政治家（議員諸侯）ならびに公僕をないがしろにしている公務員の行動倫理規程に加えて欲しいものです。

その３；伊勢信仰講中の証として、図－８ａは当地区上桜田の（宗）月山神社境内にある嘉永四(1851)年九月建立のもの、同図ｂは飯田地区の板碑集積地にある文政七(1824)年五月建立のものですが、いわゆる「大神宮」（単体）碑はどこにでもあります。なお、大神宮とは、皇大神宮（内宮）を指しますが、あるいは、皇大神宮（内宮）ならびに豊受大神宮（外宮）のいわゆる伊勢神宮を総称する場合もあります。しかし、「三社託宣」碑は、この周辺地域では珍しい範疇に入ると思っています。三社託宣の徳目で思い出すが、1890（明治23）年10月30日発布の「教育勅語」です、これも素晴らしい徳育原則の内容です。

その４；さらに、前記図－３の石碑は、伊勢の大物御師（おんし）との関連が見えて来たことから後記参考資料で補足します。

（end）

図－８ａ

図－８ｂ

【 参 考 資 料 】

1．三社託宣の掛軸

2．三社託宣掲示の宮（神社）

3．伊勢神宮の位置関係

4．伊勢御師（おんし）「三日市大夫（たゆう）　次郎秀氏（じろうひでうじ）」に係ること

5．天皇の伊勢参宮

6．伊勢御師の活動の一端

《　1．三社託宣の掛軸　》

三社託宣の図柄に関するもの（掛軸）をインターネットから拾って見ました。

・・・

図－10 は、「日本の神像」（三橋健著／東京美術）より拝借したものです。この２点は、神仏習合の色合いが濃く出ています。

図－10

図－10 左について、西野神社（札幌市西区）の HP から要点を拝借します。

鎌倉幕府を滅ぼし建武の新政（建武中興）を興した後醍醐天皇の肖像画として有名です、帝の上方には「天照皇大神」「八幡大菩薩」「春日大明神」の三社託宣が掲げられています。後醍醐天皇は自ら修法を行なう程、仏教（特に密教）に傾倒しており、そのため、この肖像画の中でも帝は、頭上には中国風玉冠を被せ、その上には真紅に輝く太陽を、着衣黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）の上に袈裟を着け、右手に五鈷杵、左手に五鈷鈴というという密教の法具をそれぞれ持ち、八葉蓮華形の敷物を敷いて、暈繝縁（うんげんべり）（最も格の高い畳縁）の畳を置き、その下に獅子を描いた礼盤（らいばん）（本来、仏が座すもの）の上にお座りになっている、という類例のない奇抜な形式で描かれています。なお、三社託宣は後で貼り付けたのか？

天照皇大神
春日大神
八幡大神
春日大明神
八幡大菩薩
天照大神宮
薬師如来
（東方浄瑠璃浄土）
大日如来
（万物の根本慈母）
阿弥陀如来
（西方極楽浄土）

図－11

また、前記この図 — 11 は私の理想とする三社託宣図（神仏混交のもの）です。

前出本より拝借した図 — 12 のような掛軸が欲しい。その理由は私が崇敬する七柱の神と「猿田彦大神」が入っているからです。

至高の神がそろい踏み　天照皇大神・諸大神絵像

伊勢・内宮の天照皇大神を頂点に、外宮の豊受大神と猿田彦大神という伊勢ゆかりの神々を縦軸に、親神の「伊佐那岐大神・伊佐那美大神」、三社託宣の八幡大神と春日大神が両脇を固める構図。伊勢国の伊藤某による発行で、伊勢参宮の人々に授与するために作られたものと思われる。（明治時代、やよい文庫蔵）

図－12

《　2．三社託宣掲示の宮（神社）　》

三社託宣に登場する神社について、その関係と場所を図－13a・図－13b により簡単に整理しました。

図－13a

石清水八幡宮
《八幡大菩薩》
京都府八幡市
手向山八幡宮
奈良県奈良市
鶴岡八幡宮
神奈川県鎌倉市
宇佐(八幡)神宮
大分県宇佐市
春日大社
《春日大明神》
奈良県奈良市
伊勢神宮
(外宮)　《内宮:天照皇太神》
三重県伊勢市

図－13b

《　3．伊勢神宮の位置関係　》

伊勢と言えば、宇治山田というが、宇治地区には皇大神宮の内宮があり、山田地区には豊受大神宮の外宮があります。場所は図－14 のとおりです。同図中赤色実線は、私が西国（さいごく）へんろ－－正味 2019(平成 31)年 4 月 2 日～2019(令和元)年 5 月 10 日までの 38 連泊 39 日間中の 37 日目の 5 月 8 日(水)に歩いた GPS トラックログ（足跡)です。外宮から内宮間は古道筋です。

図－14

《　４．伊勢御師「三日市大夫（たゆう）　次郎秀氏（じろうひでうじ）」に係ること　》

（１）ヤフーオークションより図－15を拝借しました。その中のコメントを記述して見ます。

「古筆 三社書画 伊勢御師 三日市大夫次郎秀氏の肉筆、山形県内元米沢藩　米沢旧商家宅所持」

前記図－３の刻字と筆使いが一致しています。

図－15

（２）インターネット「https://oise.jp/?p=262」サイトから関連したものを拝借します。

「三日市大夫次郎邸は明治 40 年（1907 年）の御幸道路の工事着工により南北に分断され、北側は三日市旅館、南側は本家三日市大夫次郎となりました。そして明治 45 年(1912 年) 7 月には宇仁館・西田氏に買収されました。」とあります。

なお、三日市旅館は昭和 20(1945)年 7 月の宇治山田空襲により焼失してしまい、現在はその土地には、伊勢税務署と津地方検察庁等があるようです。

（３）御師「三日市大夫次郎邸」の想定復元について

（株）大林組が企画発行したものがネット「https://www.obayashi.co.jp/kikan_obayashi/upload/img/043_IDEA.pdf」サイトに記載されています。全貌を把握するために参考となる pdf 資料（A4×18 頁相当）です。

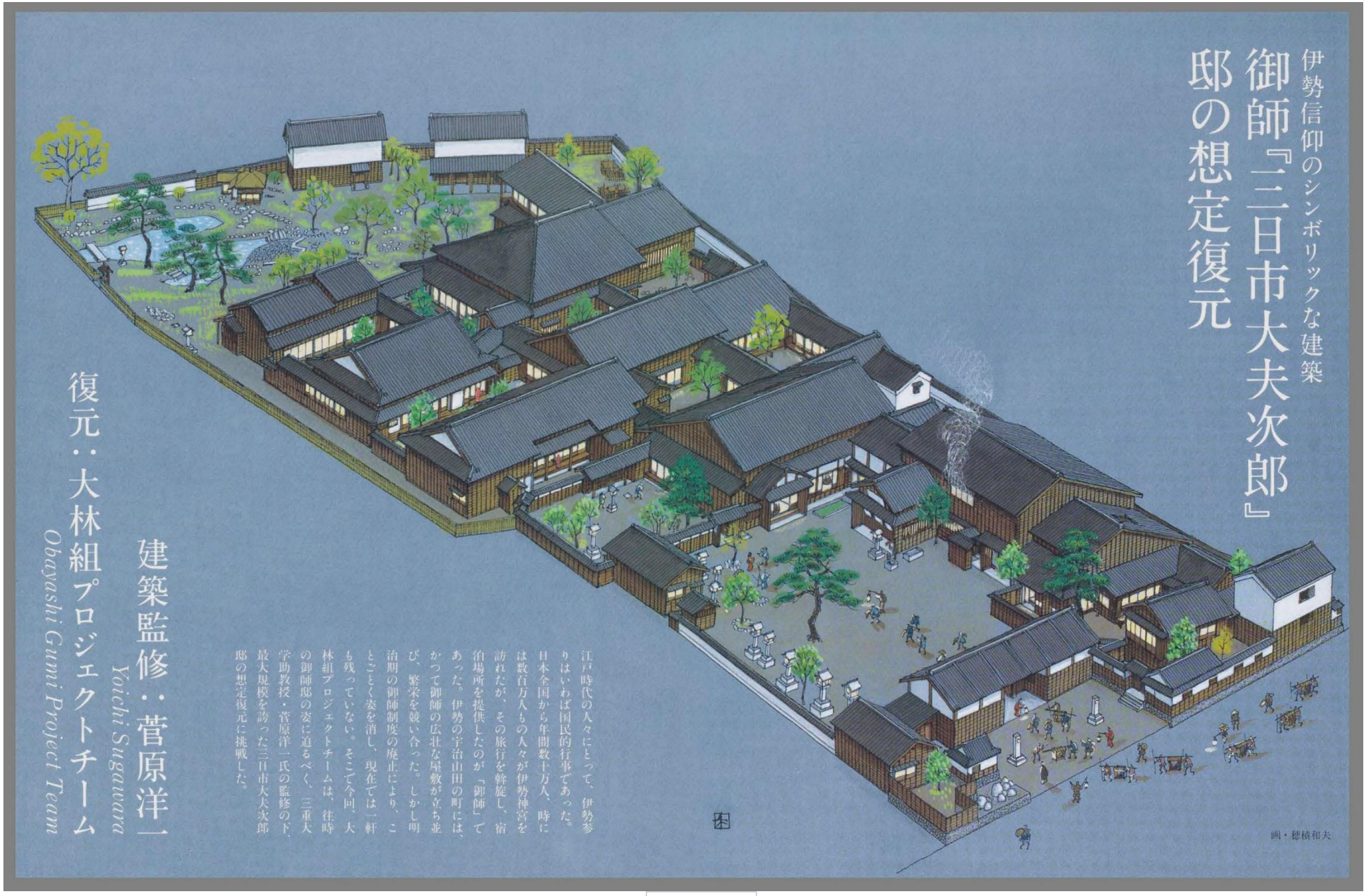
印刷すると文字の明瞭度が低下することから大林組に相談した処、有料（1,000 円/冊）で冊子を分けて貰えました。同邸の復元のことはもちろん、御師の歴史等を含めとても分かり易い内容です。表紙のみを次頁図－16 に添付します。

内容から文字の一部を抽出します。

「・・・　伊勢の御師には、山田においては『神宮家、三方家、年寄家、平師職』の四つの階級－－－宇治においても一部名称は異なるが同じ四つの階級－－－があった。神宮家は正員の禰宜で御師を兼職している者、三方家は三方会合の年寄で御師をしている者、年寄家は各町内の年寄をつとめる者、そして、平師職は役職をもたない者であった。三方家でも特に有力な御師達は、日本各地に数多くの檀家を有し、地元には広大な屋敷を構え、邸宅内に立派な神楽殿を持つ者があった。そうした実力者の揃った三方家の御師の中でも、随一の規模を誇ったのが今回復元の対象となった『三日市大夫』であった。　・・・」

伊勢御師の中にあっては、今でいう最大手ランクに属する事業家であったようです。

私の名付けは、公認の裏街道を仕切った祈祷師、であります。もちろん、裏街道を仕切る公認の人、との言い方は表向きはなかったでしょうが。


伊勢信仰のシンボリックな建築
御師『三日市大夫次郎』
邸の想定復元
建築監修・菅原洋一
Yoichi Sugawara
復元・大林組プロジェクトチーム
Obayashi Gumi Project Team
江戸時代の人々にとって、伊勢参りはいわば国民的行事であった。日本全国から年間数十万人、時には数百万人もの人々が伊勢神宮を訪れたが、その旅行を斡旋し、宿泊場所を提供したのが「御師」であった。伊勢の宇治山田の町には、かつて御師の広壮な屋敷が立ち並び、繁栄を競い合った。しかし明治期の御師制度の廃止により、ことごとく姿を消し、現在では一軒も残っていない。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、往時の御師邸の姿に迫るべく、三重大学助教授・菅原洋一氏の監修の下、最大規模を誇った三日市大夫次郎邸の想定復元に挑戦した。
画・穂積和夫

図－16

《　5．天皇の伊勢参宮　》

図－17 は、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』世拝借したもので、歌川貞秀作「伊勢御参宮之図」です。1869 年(明治 2 年)3 月 11 日に「明治天皇」(画面中央）が御輿に乗って「伊勢神宮（絵は内宮)」を参拝したときの様子を描写した作品です。　神宮は皇祖神を祀るといいながら、公的に参拝された天皇は歴史上では明治天皇のみとなっています。ただし、持統天皇（女性）は 692(持統天皇 6)年 3 月 3 日、周囲の反対を押し切って参拝されたということです。

図－17

《　6．伊勢御師の活動の一端　》

神奈川県の秋田耕司さんが纏められた「『御師』大研究中間報告」について、ネット「http://nfc.no.coocan.jp/ise-onsi-study.pdf」サイトに公開されていますので、私の特に関心のある「御師のおもてなし」という題目部分を抜粋して、次頁以降に添付しました。

ここにおいても、「三日市大夫次郎邸」が紹介されています。

伊勢参りに参宮した人達は、とにかく驚くほどの厚遇、手厚いもてなしを受けたということが分かりました。一生一度のあこがれの伊勢参り、豪華絢爛・贅沢三昧を尽くしたということでしょう。逆に御師側では、そのような大判振る舞いの接待を図っても繁盛した、儲かったということです。

あらためて伊勢御師の役割について、前出秋田さんの当該報告の「はじめに」の欄に次の様に書かれています。他に様々な書き方はあるが、平易で分かり易いことから再掲します。

「・・・御師は『御祈祷師』あるいは『御師匠（おししょう）』に由来すると言われ、他の有力社寺に置かれたものを「オシ」と呼ぶのに対し、伊勢では「オンシ」と呼ぶのが通例である。また御師が「大夫」を称するのは、権禰宜になると五位の位＝大夫を授かったことに由来する。仕事は、私幣（神宮の神様に対して、自分の利益招来のために幣物・供物を捧げ祈ること）禁断の伊勢神宮へあえて私幣するために祈祷する祈祷師であり、現在で言う神宮への旅行業者をも兼ねていた。全国の檀家を廻ってお札（神宮大麻）や伊勢暦などを配って参宮勧誘を行い、神宮を訪れる伊勢講の人々のために祈祷を行い、宿泊や観光も含む神宮の案内の世話をしていた。・・・」

＝＝＝

<table>
<tr><td colspan="3">秋田耕司さんが纏められた「『御師』大研究中間報告」の抜粋</td></tr>
<tr><td colspan="3">1．廻檀</td></tr>
<tr><td>廻檀(檀家廻り)</td><td colspan="2">御師の家来（代官・手代・先達）が年２～３回、全国各地の檀家を廻り、初穂料を得ていた。 大夫が代替わりの時などは家来４人と下男１人を連れ、下男には御神木箱、御祓櫃、打物、長柄傘、雨具籠を持たせ、大夫は乗り物に乗るような行列の規模で廻檀を行っていた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">御祓大麻の配布</td><td colspan="2">その時、御祓大麻（おはらいおおぬさ）＝御祓（剣先祓、千度・五千度・万度の御祓箱）を配布した。
大麻は、本来は祓いに用いる用具のことで、願主の要請により御師が祓いを行い、その証として大麻を和紙に包んで願主に届けたのが御祓大麻である。現在は神宮が直接、配布している神札を神宮大麻（頒布大麻）と呼ぶ。</td></tr>
<tr><td>

剣先祓（けんさきばらい）

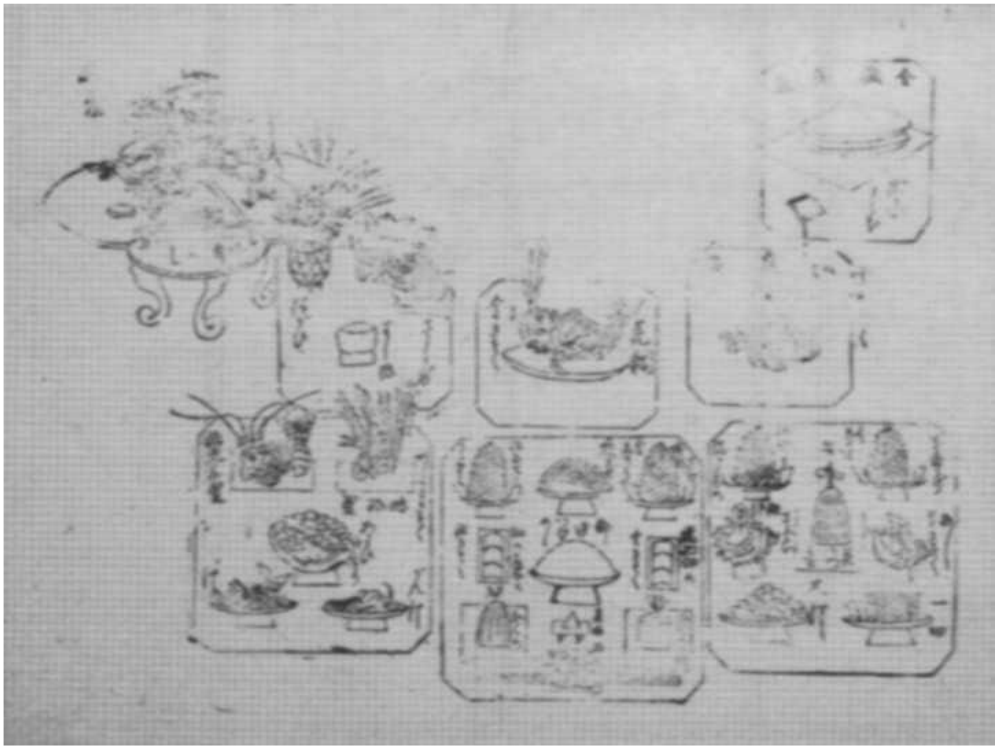
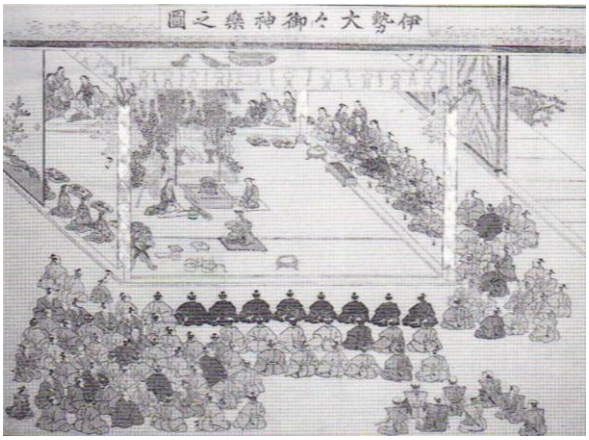
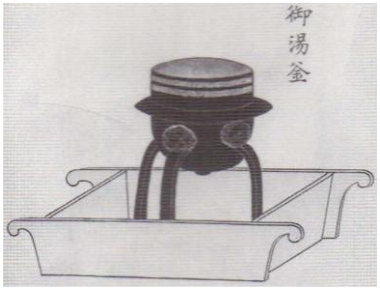
紙を剣先型に折り、中に串状の細い木に細く断った上質の紙（ぬさ）を巻き付けた御蕊（おしべ）を包んだもの</td><td>
御祓箱（おはらいばこ）

貴族や大名などの特別な檀家に授けられたもので、祓詞を 10 人で１回奏上した時を百回と数え、さらに多くの御師が何遍となく奏上して千度・五千度・万度としていた。箱から出して神棚にお祀りしたので木箱は不要になったことから、要らなくなったものを捨てることを「おはらいばこ」というようになった。</td></tr>
<tr><td>伊勢講</td><td colspan="2">参宮費用の積み立てを教示した。
伊勢講田（こでん）、神明講田（しめこだ）という講員共有の田畑からの収入を充てることも指導した。この地は不測の事態が発生しても差し押さえられることはなかった。
講を組んだ仲間から数人の代表が参宮することを「代参」と称し、主であった。
参宮にかかる費用は「為替（かわし）」で送金した。</td></tr>
<tr><td>旅のアドバイス</td><td colspan="2">旅のアドバイスをした</td></tr>
<tr><td>御伊勢宿</td><td colspan="2">回檀の時に御師が宿泊するところを御伊勢宿と呼び、各地に設けられていた。
御祓や土産の保管場所にもなっていた。</td></tr>
</table>

土産	伊勢暦	他の暦に比べて正確であり、農事の便も考慮して八十八夜や二百十日なども記載されていたために農村部で重宝された。 伊勢暦は毎年、祭主藤波家より朝廷に依頼して、土御門家（つちみかどけ）より暦の写本（官暦）を受け、それに宇治と山田の陰陽師が考えたところを加えて 11 月までに幕府に発行許可を貰って版木印刷したもの。
	その他	薬、伊勢白粉、海産物、衣類、日用品、器物、農産物など多種であった。
	嘉例状（かれい）	檀家に渡す挨拶状（美濃紙に木版刷り）も持たせた。　（嘉例とは、めでたい先例、よい定めをいう）

2．参宮道中の旅	
旅費	代参者は御師に旅費を納める。
道中	御師の手代などが同中の世話をする。 御師の契約宿「講宿」に宿泊する。

3．伊勢での参詣	
1 週間程度か？　支払いは御師に任され、お金のことを気にせず参宮した。	
迎え	宮川に御師が運営した無料の渡し船「御馳走舟」年中無休であった。 参宮客が宮川を渡ると中川原。建ち並ぶ茶屋や旅籠の中で担当御師の看板のある店で講の名前を告げると、御師邸に知らせが行く。 迎えが来るまでは酒や食事が振る舞われるが料金は取らない。 御師の手代が迎えに来ると、籠や馬に乗せて御師邸へ案内される。赤い毛氈を敷いた駕籠を人数分用意して、荷物の運搬のために紅白の手綱を付けた馬も用意された。 高額な奉納金を支払った参詣者には六軒(松阪市)や明野(小俣町)あたりまで、駕籠を待機して送迎することもあった。
豪華な宿泊	檀家の参宮者に宿泊の便宜を図った。有力な御師の邸宅は豪壮な建物であった。 例えば、「三日市大夫次郎邸」（現、伊勢税務署と津地方検察庁）は総面積 1,800 坪、建物の総床面積 800 坪。客室は 5 棟に分かれて建っていて、 4 畳から 16 畳の部屋が全部で 32 室、63 畳の大広間、畳を横に敷き詰めた 1 間の廊下、30 畳ほどの神楽殿があった。 1 日 100 人近くが宿泊出来た。
到着	到着すると、無事到着を祝って簡単な食事、風呂に入って身を清め、月代（さかやき）を剃って髪を結い直す。
挨拶	裃で正装した手代を引き連れ、衣冠を正した御師の挨拶（奉納金の高低による区別はなかった）があり、 酒や菓子折りが出された。
寝具	羽二重（はぶたえ）（縦糸・横糸に良質の撚（よ）りのない生糸を用いて、多く平織りとした後（あと）練りの絹織物。肌触りがよく、つやがある。礼服や羽織・羽織裏・胴裏地などに用いる）や、緞子（どんす）（繻子（しゅす）地に同じ繻子の裏組織で文様を織り出した絹の紋織物もの）の布団を敷いた。 普段は木綿ふとんで寝ている人達には夢心地だったであろう。

食事	一の膳～四の膳、追加の膳等豪華な食事が用意された。金銀の大盃が回されて、酒もふんだんに出た、飲み放題であった。 
御神楽を奏（そう）する	神宮は私幣禁断で公儀（天皇と一部の皇族）以外の奉賽（ほうさい）は受け付けないため、参宮者は御師に依頼して御師の館内の神楽殿で神楽を上げて神宮へ奉賽した。 必ずしも奏行する必要はなかった。大々神楽、大神楽、小神楽の３種があった。 神楽は大釜で湯を立て、巫女や神職が榊の枝で湯を振り撒く「湯立て神楽あるいは霜月（11 月）神楽」であった。 御神楽中は正装するために羽織・袴を借りた。 神楽殿を併設している御師邸は神楽奉納に熱心な東国の檀家を持つ御師が主で、内宮は４軒、外宮は 20 軒ほどで少なく、その他のほとんどは必要があれば広間で行ったり、他の御師の神楽殿を借りた。西日本の檀家は神楽奉納は少なかった。 神楽職人は御師とは別で、内宮は楠部、外宮は町民中から神楽をあげるたびに御師邸に来ていた。  

参詣	馬に乗せ、多くの人が付き従い、外宮・内宮を参詣した。
観光案内	両宮参拝の他、朝熊・二見などの名所旧跡まで駕籠に乗り手代が案内した。 昼食は酒付の三～五段重箱で、御師邸から休憩所の茶屋に運ばれた。 古市（ふるいち）での遊興もあった。外宮と内宮の間にある古市という歓楽街は、江戸の吉原、京都の島原と並ぶ日本三大遊郭の一つであって、遊びは殷賑（いんしん）－－－「殷」はさかん、「賑」はにぎやかの意－－－を極めた。
土産	土産は御師が回檀で持って行った伊勢名物などであった。 買った土産は宅配するシステムがあった。
帰路	御師から参詣に参加出来なかった講員の分も含んで御祓が渡され、酒、盃、菓子などを土産として持たせた。これらの土産とともに手代や小僧が重箱を背負って宮川まで運び、一献を酌み交わし歓送した。 御師のネットワークで旅を続けることが出来た。 回檀の時に御師が宿泊するところを御伊勢宿と呼び、各地に設けられていた。 参宮後、熊野や奈良・京都・大坂・四国の金毘羅宮や西国 33 か所巡礼まで足を延ばす人もいて、２～３ヵ月に及ぶこともあった。

（完）